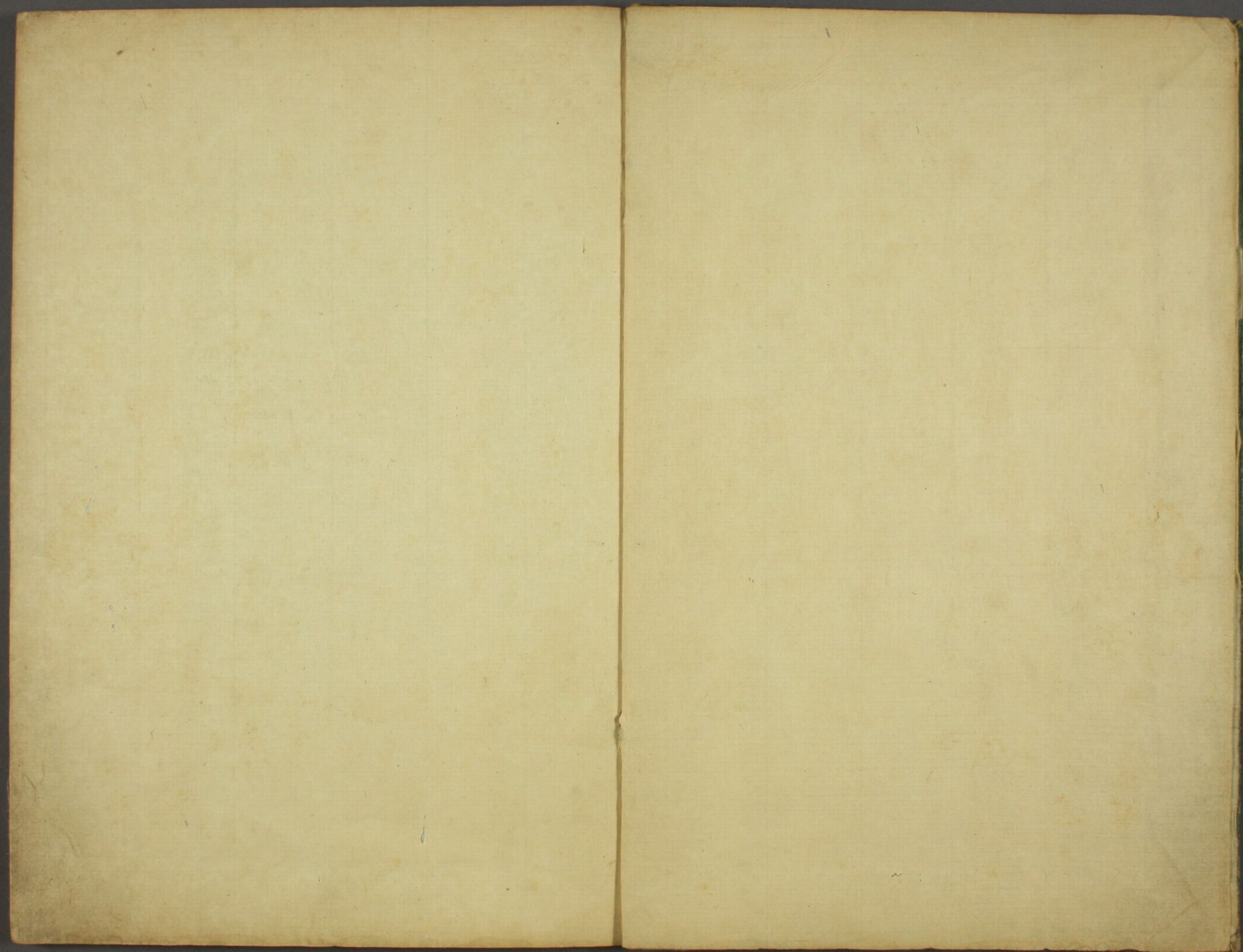




三才圖會卷之三





三奏金葉集附録

三奏を以て考へり金葉集の世に絶くを傳へたること  
流るるにも出づる本此書本より足るを述べて  
たゞる名をふりてしるありたれと終りてしる

清輔袋草紙云

金葉集和哥

六百九十四首

此外連哥十六首  
但流布本是也

白河院御讓位之末俊頼朝臣一人奉<sub>分テ</sub>院宣<sub>ヲ</sub>  
撰<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>天治元年月日奉<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>大治元二年之間上<sub>テ</sub>  
奏<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>此集本不定也奏覽之處兩度返却第<sub>三</sub>



度、之度以中層草案先覽之而件本無左右納  
畢仍撰者詩二無此本云々件本在故待賢門  
院而今前大相國申出書寫之無餘所云々件本  
兼盛能宣哥并立之集拾遺集等入之拾遺ハ  
柄二成テ稱棄置之由入之也寂前哥重之力  
吉野山峯ノ白雪何時消テノ哥也世間二流  
布本ハ第二度本也近代人歌等也寂前故將  
作打靡哥也奏覽本造紙云々自筆書之云々  
八雲御抄ニ乃々まはら

院漏周以  
下六字未  
詳

金葉集初ハ三代集作者中一度流布定後始源  
重之有連哥三ヶ度撰改以第二度本既流布  
多ハ近世人但六帖并道濟相摸等入之云々  
同御抄下金葉集第三度本ハ乍草先奏而自  
待賢門實行下給テ披見之間其外本不留其  
本ハ燒後清書ハ時ノ能層也云々  
續世継むらハ野の料乃卷にいはく  
後頼のちし金葉集云々にありたりに  
けん貫之云々と春日神のみ

其次に覺雅法師と云入るひをを覺るもめり  
たしといひたり二代集にも進まぬありふ集  
あり覺雅法師に云にもつたる書にほり  
ら進めぬハあるきふ事とも入る一あり又  
と一更れく書しめ人乃そくへかりたり  
た本元の人を此の書に次の書に書りたり  
も書にとも覺るすと何れを又法なり  
たはしと源重之けめに入たるを抄とせん  
七ありたりとく礼と世にも正るまうて中  
度

乃世にらちをたあ

増鏡抄と流の巻よ

白河院ありありと後重葉集にあり  
俊頼の信よりせり撰ばせありと我初め  
たりとに輔仁親王の成石の里とあり  
とて返りてありとありとありとありと  
云ふとありとありとありとありとありと

直見考に此本は奥本と成石子紙乃説と大  
正の同く八雲法抄増鏡とありとありと

あつたれと續世徳よのこ初度の巻頭の託た  
うへ出ら初度の本冠土あはもんたにひつり  
貫之の巻九うらに書之こととに芳野のといふ  
はし免に〜そ次の〜覚持法保ふわと徳を  
徳のう〜正〜うりうとそ昔今世よあまわ  
ひろまりたらち中れをいれ本なとと初度二  
度ともよ味守りたうもの船はた〜人者こ  
度とまう〜ひつにやあ〜むと草案れ〜所奏〜こ  
ころと所れをむ〜一書なれぬ〜免〜中

一〜そ中〜所おにと〜あ〜を〜とた  
はく申せらん〜と〜と〜と〜と  
よもえ字〜と〜免はをなは〜撰者の許  
さ〜此本れあ〜さ〜一〜さ〜は〜り免  
ま〜と〜東のるは〜れらあは〜り〜と  
う〜と〜竊よおも〜ら後拾遺集も同〜と  
白河院乃御事〜と〜徳のころ中納云通俊  
に撰進あり〜と〜と〜序中にも詳た〜と  
八雲原抄代名抄紙た〜と〜通俊私よ〜と

所記の事と云ふ事しるすに新屋拾遺  
なるいふ所は出づるまゝの後の記述ありと云ふ  
ことには三代集に次ぐる集もいふ所は  
之を交ぜし上にも記すにそや抑り所あり  
よりせうに俊頼の長に云 院宣下り一  
巻に所記する二度まゝいふ改むるは  
三度の所をいふなりと云ふは感  
愛まじくまゝにこそ俊頼の長も亦その頃  
なりふ人れありと云ふに百と二度の精探い

に心を尽すは是たありと云ふ君も臣は身をあはせ  
きりしと云ふはたはしむるふへうした中ぐり  
是るに哥も此れをたきと云ふも更に  
一と云ふ所は端初れと云ふいふと云ふ  
古今集にも次へよる金葉集になん有る  
うは代衣子紙一件本在故待賢門院而今前  
大相國申出局寫之無餘所云とありと百  
練抄續世継なりと云ふ老尼の待賢門院  
白河院乃流養女に云 鳥羽帝此中宮と云

あは皇子なりとあまの証ありて其頃こゝに  
時めけりて進み流るるもたゞのたゞてさへも  
流皇の流るるにたゞの流るるをさへ進  
きをあらひて一歌書とも流るる物あり  
るこゝに既萬壽のそはるる貫之朝臣自筆  
古今集道風流るる流るる萬葉集たりと皇  
太后宮流るるにその流るるを陽明門  
院より流るるをあらひて流るる物流るる  
に思ひあはせられりたりと大相國發行

公ら待賢門院の流るるに七十二集ありたり  
へりて流るるに門院の流るるに流るるを申  
おろしてさへも流るるありて流るるに  
るるお流るるに流るるありて流るるに  
能るるに仰せり待賢門院の流るるに流るる  
より八中も流るるに流るるに流るるに流るる  
を流るるに流るるに流るるに流るるに流るる  
時せりて流るるに流るるに流るるに流るる  
事ら時の流るるに流るるに流るるに流るる



一々の紙傳つたをうたれたけりまゝらん紙抄し  
はつゝ進たれり。

同袋草紙二件本兼盛能宣并玄々集拾遺  
集哥等入之云々とありて此本つゞんて此  
兼盛能宣の和にも朝忠順望城忠見中務なと  
此哥ありんて是れ天徳四年内裏哥合の云々  
とも此中へりとり入つて進たつたりの云々を  
玄集乃中れり云々花山院御製重之好忠長  
能俊平道綱母法少納云僧都清胤惠度法

師をうた哥とも云々なり執巻集の中れり云々  
重之乃云々花山の哥順の哥を云々云々任々の  
兼盛の孔好志乃此本云々此中云々子の云々此  
也云々思つて世に流布の本とら此本不同云々可  
也云々云はれり云々云々云々云々云々の哥の總計五  
百七十六号ありて流布本とら此本に云々  
同書に拾遺集を柄二成テ稱弃置之由入之也  
云々とあり此本乃奥書にも拾遺集云々集  
多以入る云々云々云々云々云々の浮説のありし

を漫と志るをるたてて拾遺集をうけにな  
して弃置せしむんをうけにあつていふ  
ことなりふことはれしむるをいふ  
をうけ四首をのぞきてはるるに拾遺集に  
うけかゝるにふしむ又その四首の中にも重之乃  
歌をまゝ集願のち天徳の奇合れしに  
好忠と名任々乃二首を家集より撰出せし  
しなる一々家集より出せしむるを撰出  
せしれしむる也すれをうけに撰出せしむる

こゝからんはるるを物きしむるをうけに  
にも後拾遺集の中れる兼源の志れ正之の撰  
たしむるをいふ也すれをうけに撰出せしむる  
集にもとこゝからんはるるをうけに撰出せしむる  
こまなりしむる上代のてあり志れしむるを  
けしむるをいふ

中より同事に詞花集のこと志る也るは天養元年  
六月二日奉之<sup>ウケタテニ</sup>仁平<sup>ニ</sup>奏<sup>ラ</sup>覽<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>云々予為<sup>リ</sup>御使<sup>ト</sup>  
持参<sup>ス</sup>彼亭<sup>ニ</sup>奏<sup>ス</sup>覽<sup>本</sup>ハ布目色紙自筆也金葉

集付流布本第三度歌不除之件本無知人  
之故也云々宣下状云被院宣云自中古  
以来不入勅撰集之外和哥等宜被撰集者  
仍執達如件教長謹言六月二日参議教長  
奉謹上左京大夫殿云々と何を云んれと云此  
大治二年より九年天艱六年中より十九年の  
間なるに三度奉らせし宛と云人此より一祝  
志るく又此撰志顯輔卿と清輔朝臣父子と彼  
前大相國よりとりし申以て云々云々云々

所抄せし進たんとおぼし  
たそりしと云々今度中古よりこれとの勅撰  
下ししはる哥とも撰申へしと云院宣云々  
くさく金葉集第三度哥不除之云々云々  
志るす進出へしこれを除く乃そ云々ある  
久全く引あはせし取捨せし進たれし悟勢あ  
らはたしと云々了しを除くはしし詞花集より  
入所れきる云

花山院御製

木の本とほみうすきくおろしうきんく人よ常ぬへ上これ

大中臣純宣朝臣

梅をのせにしちぬぬれし思ふ事な上春にそあはは

大納言道綱母

それ此教と定めし我とたうとと我ふふ山有土の地

曾根好忠

松川の流丸康のうに枕するを深きやうと也を

大納言公任

以て方よ秋乃ゆくらむ言ふよとむし計と商やとりせ

和泉式部

まろふのなしたるうらむにせむおまうく惜土庵の雲我

清少納言

らうとくも流るはる吾よちうひをり頼めくこの後を

増基法師

我思ふこと此志けしたるいおれは信たの杜乃子枝とあま

大江正言

おもひおもいた上友字の山なれと徳也ゆくくあは也也なり

惠美法師

詮に「池の心」哲のん底にやられる所の少きと  
 是れ此の心も詞部集の中にもすまれぬと免くを  
 くまゆるを免くはく免るべしとて度本をこ  
 そていふ所も亦互也。進たる也とて  
 既流布本に此の流布にたにもこれはたてしや  
 びらまりたることいふべしとてされたる籍に  
 二度の本に為代の寄人ありとて進たるを区  
 くことしむく世に出るく進たることしむく  
 誰もわくらに字の借り物一つもめはらば

ふちくうのめおと世間よりあまわくな祭  
 たるにこそは八雲流抄は三ヶ度撰改以第二  
 度本既流布多近世人云々志はせぬも  
 せふことしむく世に出るく進たることしむく  
 たむことしむく世に出るく進たることしむく  
 にくれうに既後拾遺集撰の時伊房の流  
 書志あふへうりしとてこれ乃孔を一首を  
 以てせられたるを免くはく免るべしとて度本をこ  
 ぬはせりしとてすにもおしけられぬとて賀

茂成助神との奇流布の本にらるるを連と云ふ  
亦此三度の本にも連歌は入りしれども  
哥のも連たるを介了たよ何とやらむ口哉  
しくて流布の本なりしをうらむれり  
中しをともたぬゆにもいふく思ひあはれり  
也うし又これ三奏本も大治四年  
法皇も山朋ありれはとり傳へてをりし門院  
元はくぬぬめりし撰者俊頼朝臣も程れく率去  
ありくわらむし世にハあはは進すなり架た

なり

此本此書中に第三度奏覧本云々當本既是  
也可指南歌云々と志すれをぬりしに  
子載の後乃ありしをいふはよき教ありし  
にく世よ重を系集といふも二度の本れりこと今  
も編れちを天保此の書もて樂をひとな工火  
乃こころにもあはれ書もこをたせく傳はせり  
全く重厚に書めたること記りたかくこそ書けり  
かりせり

此本の筆者後京極攝政殿なりといひ傳へ  
きしと云ふことには良經公の書傳と道風公  
臣北十一世朝方卿より相兼し之を佐理と  
乃墨痕となつてさうく之を此一本と物  
しむるは更よまうふつても傳に志すは  
金葉集例より所書体のさう何れもその  
まにせよ稀れま一冊をわらうに成るこゝ  
る能くまうの第一にやく此の書はたう  
をくたう人多くは後京極流ともまうた

るれりるしとくをたせうら有うた手本とも  
にア

表題らそれ人の筆とも志すは三百巻後  
此年と云ゆるがかりを

天保四年三月 正徳下伊豫守賀茂縣主直兄誌

あらうは三巻乃一本さして乃とわくへ土たうはと  
 歌中うれ可也と地帯あるもあつここれ通とさする  
 うここくに熟たうし故経樹縣をた一点をた  
 かへに写しせれ土身しをここの本にたあつ  
 せたるたうりまをまはうにたひんそやうんゆふ  
 したるしーはあつたさうと停子中説さん  
 う歌中これハすて原本乃まうをあせしなう  
 守定て保九事北八月直先うと記志とあ



